
flowering garden

メレンゲ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

flowering garden

【Nコード】

N4787Q

【作者名】

メレンゲ

【あらすじ】

寒い年末の夜、酔っていた笹野亜弓は、困ったように立ち尽くす男を拾って帰った。実はその男は、異世界からの迷い人？え、人じゃない？ドラゴン！？、世界が変わる事件も、天変地異もおこらない、ほのぼのとした日常生活の話です。R15は念のためです。

椿 1

普通電車しか止まらない小さな駅は年末の最終に近い今の時間、ほとんど人影はなかった。

暖かい車内から寒い外に出て、笹野亜弓ささの あゆみはぶるりと体を震わせ、コートコートの襟を詰める。

天気予報は年末から雪の予報を出していた、厚い雲とこの寒さでは本当に雪になるかもしれない。

飲みなれないアルコールに顔はまだ熱っているが、さすがに体の寒さまでカバーしてくれない。

亜弓の働いている会社は今月に入ってから、今日まで日曜もろくに休めないほど忙しかった、やっと明日から5日間の正月休暇にはいる。

この時間唯一開いている駅前のコンビニを通り過ぎ家へと向かう、コートのポケットに手を突っ込んで俯いて足を速めた。

古い住宅街に人気はなく、ところどころ設置された街灯が光を投げかけている。

開発が進んでいない古い家並みが多いこの町が亜弓は好きだった。

今の時間閉まっている酒屋の前を通りかかる、明るい自動販売機の前前に立っている人影に気づいた。

長い灰色の髪に黒い長いコート、女性かとも思ったが自分よりはるかに高そうな背と、がっしりとした体格にそうではないことがわかる、自分には関係ない事と後ろを通り過ぎてから気がついた。

このところの忙しさに家の冷蔵庫がすっかり空っぽなことに、買い置き置きの非常食非常食にしていたレトルト食品や、飲み物、米さえない。

足を止めて考える、今は打ち上げの飲み会のためお腹がいっぱいだ、しかし喉は乾いている、それにこのままだと明日の朝目覚めた時、何も食べるものがない。

今だったら5分ほど戻ってコンビニで買い物したら、明日は午前中思う存分のんびりできる、昼から掃除や買出しに出ればいい。

ため息をついてくると振り返った、自動販売機に立っていた男と目が合う、見るからに西洋系の顔立ち、整っている顔は自動販売機の光の陰影で余計に彫が深く見える。

映画でもめったにお目にかからない、美形だ。

亜弓は英語を話せないこともないが、あまり自信はない。

目があったことに気付かないふりをしてコンビニへ足を速めた。

明るいコンビニの店内に入り、あれこれとかごに入れていく、何か困っているのだろうか、先に見た男のことが気にかかる。

買いすぎかと思うほどいっぱいになった袋を持ってまた歩き始める。

同じ場所で男がこちらを見て立っているのに気がついた、途方に暮れているように見える、

コートと思っていたものがマントであること、その下に見えるブーツが、舗装されていない山道でも歩いていたように泥に汚れているのに気がついた、そして光のせいか疲れ果てているようにも見える。このまま放っていたら、いくら頑丈そうでも明日凍死死体になりそうだ。

「May i help you?」

精いっぱい笑顔で話しかける、後で考えてみるとだいぶ酔っていたのかもしれない、いつもの自分なら深夜に得体のしれない男性に話しかけることなどありえない。

「*****」

話しかけられるが何を言っているか全然わからない、困ってお互い見つめ合った。

光を背に薄暗い中、その瞳だけは薄い透明に近い水色で、唐突にどこかで見た色だと思った。

ゆっくりと、まるで恐る恐るというように手が伸びてきてそっとむきだしの手の甲に触れる。

亜弓は振り払うこともせずに、男の瞳に見入っていた。

（ここはどこだ？）

頭の中に声が響く、驚いた手からコンビニの袋が落ちた。

「え、あのN市だけど」

（それはどこだ？）

「日本ね、あ、ユーラシア大陸の端っこ、太陽系の第3惑星地球。」

つい、前日まで請け負って作っていた子供学習館のHPで使っていた言葉で返す。

（ちきゅう・・・）

困ったような声で言葉が途切れる、その姿が、自分より30センチは高いがっしりした男なのにかわいく感じた。

「もしかしたら行くところないの？」

言葉は返らないが、困ったように眉が下がる、それが隣家に飼われているゴールデンリトリバーに似ている、酔っているせいか、その金色の頭に伏せた犬の耳さえ見えるようだ。

「いいよ、うちにおいでどうせ一人暮らしには広すぎる、」

祖父母が建てて、父母が暮らしやすいように改築して残してくれた

家は、一部2階の一戸建てで一人きりで暮らすには広すぎる。

「こっち、」

触れていた手を離して引き歩き出した、男は亜弓の落した袋を拾い後について歩き出す、その様子に少しほっとした。

椿 1（後書き）

はじめまして、

完結を目指してぼちぼちと、書いていこうと思っています。

突っ込みがいのある、ぬるい展開になっていくと思いますので、構成や設定の完璧な話を読みたい方には不向きだと思っています。

椿 2

笹野の表札がある門を通り、数歩歩くと古い木造の玄関になる、見かけは古いがちゃんと補強してあり鍵も見えるものが2個、内側から隠して一つついていて、いくらここ数年事件の起きていない平和な住宅街でも、一人暮らしの家は用心するにこしたことはない。

そう思いながらバックの中の鍵を使い普通の鍵を開け、もう一つ扉の横に見えないように取り付けられている木製の蓋をずらしパネルに暗証番号を入れる。

かちりと音がしてカギが外される、いつも用心しているくせに、今、見も知らぬ人間を、それも見るからに怪しい男を、家に入れる自分の行動が楽しくて仕方がない。

「ただいま。」

返事が返ってくることはないが、いつものように言葉をかけて玄関へと入った。古い家らしく床が高く、右端は足の悪かった祖父の為にスロープになっている。

「ここで靴を脱ぐのよ、」

見かけは完全に西洋系の人間だ、日本式の家を知っているようには見えない。

男は不器用に編みこまれたブーツの紐を解き靴を脱ぎ上がる、低い下駄箱の上に飾られたブリザードフラワーや、母がどこかで見つけてきた古い天使の置物を珍しそうに見ている。

家まで歩いて行くうちに街灯の明かりに、男の着ているマントが埃にまみれているのに気づいていた、亜弓はそのまま居間に行きたくなくて自分から男の腕を触った。

（えっと、聞こえる？そのマント？ずいぶん汚れているからここに置いてほしいの、明日洗濯するから。）

（わかった、）

男は頷いて、首元にある留め金を外す、そのまま落ちないようにマントを抱えてそっと玄関のたたきに置いた。

今までマントの下で見えなかった男の腰に下がった剣に、ぎくりと身を震わせ一歩後ろに下がる。

テレビの時代劇で見る細身の刀とは違う、幅広で革の鞘に入ったそれは、ずっしりと重量感がある。

おびえた顔に気付いたのか、離れた指をそっと掴む、怖がらせないように気遣ったのか、その手は亜弓が振り払えばすぐに外れるくらい力が入っていない。

（神に誓おう、俺の剣はそなたを傷つけることは決してない。）

片方の手は拳を作り胸に当て頭を下げる、時代がかったそのセリフと仕草は彼の服装にとっても似合っていた、昔見たファンタジー映画にでも出てきそうだ。

（えっと、わかった、えっと、おなかはすいていない？）

困ったような顔で返事を察する。

（ちよっと待ってて、簡単なものでいいよね。あ、その間にお風呂に入る？）

時間のかかる料理を作る余裕などない、アルコールのせいと、剣を見た緊張とその後の弛緩に眠くてたまらなくなってきた。

（風呂？）

返事が返ってくる前に触れた手を掴みなおして浴室へ誘導する、空の浴槽に栓をして湯を溜め始める。

いくらイケメンだろうと、汚れたまま寝具に寝かせたくはない。

（お湯が溜まったらこれを下に下げれば止まるから、それと、これがボディソーブで、こっちがシャンプー、）

（ボディー？）

（えっと、体を洗うの、このタオルにつけて泡立てて、シャンプーは髪を洗うの。）

コンディショナーやリンスの説明は今日はいいだろう。

男は頷いて、服に手をかけた。

（着替えは後でここに置いておくから。）
脱衣所に置かれた洗濯機の上を指差した。

それだけ伝えてあわてて脱衣所から出て1階の奥にある両親の部屋へと向かう、ちゃんと掃除はしているが、それ以外はあまり入る事はなかった。

遺品や衣類の整理をしなくては、と思いながらも何かと理由をつけてそのままにしている。

箆笥を開けて父親のスウェットの上下を取り出す、大柄な父だった。彼には少し小さいだろうがしかたがない。

下着を探そうと箆笥を引っ張り出す、一度に父母を喪って3年たつ、片付けようと思いつながら出来なかった事が、役に立つ日が来るとは思わなかった。

専業主婦で家事が好きだった母親なら、きっと買い置きがあると思っていたのが当たって、箆笥の一番下に未封の肌着を見つける。袋から出してスウェットやバスタオルと重ねて脱衣所に持って行った。

簡単なもの、時間がかからなくて、多い方がいいよね、と、焼うどんでいいや。

焼そばより、面が太い分ボリュームがありそうだ、そんな安易な考えで袋をごそごと開け始める。

残念ながらコンビニに肉は置いてない、野菜も冷凍庫に切って凍らせておいたピーマンが少し残っているだけだ。

手早く作りながら、リビングから続きの間になっている畳の部屋に客用布団を敷く、長く干していなかったので、少し湿っぽい仕方がない。

二人分の冷凍麺で作った焼うどんと、わかめスープ、お茶の準備ができた頃、風呂から彼が上がってきた。

椿 2（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ぽつぽつがんびりますのでよろしく願います。

入浴剤の入れすぎで、ピーチ臭すぎのメレンゲでした。

椿 3

家で食事を作るときは必ずする事にしている、小さな器に作った焼うどんとお茶を、リビングにある小さな仏壇に置き手を合わせた。祖母が亡くなった時、一人にさせるのがかわいそうだと、家族が集まるリビングの端に蓋を閉めたら小さな収納家具にしか見えないシンブルな仏壇を置いている。

そして今、そこに亜弓を除いた家族みんながいる。

彼が低い引き戸に身を屈めて入ってきた、父が日常着ていたスウェットは似合わない、こちらの方が着ていた服やマントより当たり前のはずなのに、まるでコスプレのようだ。

（食べて、箸よりフォークがいいよね。ああ、忘れてた、私は亜弓、笹野亜弓、あなたの名前は？）

（エドアルドだ、亜弓、すまないが世話になる）

父がこだわった堀炬燵に座るように促して、自分が風呂に入る間に手持無沙汰にならないようテレビをつけた、いつも見るニュース番組が始まっている。

チャンネルを自由に変えられるように、リモコンを近くに置いて部屋を出た。

脱衣所に入ると、着替えを置いてあった洗濯機の上に、彼の着ていた服はきちんと畳まれて置いてあった。

人の入った後の浴室は温かい少しほっとする、家族を喪ってから、こんな感じは長くなかった。

今まで彼はいたことはあるが、恋人になるまで付き合ったことはなかった、初めて家に入れた男の人が、初めて会った、それも素面であつたら絶対声をかけないだろう相手だったのが自分でも不思議だ。

メイクを落として鏡を見る、醜いとは思わないが、誰が見ても平凡な顔だ、整いすぎのエドアルドの顔を見た後は余計に平凡に見える。それも染めていないボブの真っ黒な髪と真っ黒な瞳は、彼の色合いに比べたら地味すぎる。

体つきも平均で、ただ胸だけが母に似たのか大きく、初めて会った相手が男だと、顔を見るより胸を見られるのが厭だし、子供を産んだら垂れるだろうなあ、とちょっと憂鬱。

体と髪を洗い、頭にタオルを巻き湯に首まで浸かる、冷え切った手先がジンジンする、目を閉じてじっとしていたら眠気で頭がこくりと動いた。

危ない、寝てしまう、もっとゆっくりしようと思っていたが、さっさと上がることにする、真っ裸で風呂場で溺死なんて厭すぎる。

パジャマの上にガウンを着て髪を拭きながら脱衣所を出る、あくびが止まらない。

リビングに戻ると、エドアルドがくいいるようにテレビを見ていた、食事の済んだ食器は一处に重ねてある。

食器を片づけようと近寄ると、亜弓に気付いて手が触ってきた。

（髪が濡れている）

その後手は離れて小さく横に振られる、すうっと自分の体に涼しい風が触れた感触があり、目の前に10センチほどの水の玉が浮かんだ。

「何これ」

ふわふわと浮かぶそれが綺麗で触ろうと指を伸ばす、届く前に細かい霧状になって消えた。

「えっ、加湿器？」

言いながらも自分で馬鹿な事を言っていると思う、あわてて彼の手をつかむ。

（何これ）

（人は弱い、濡れていると病気になる。）

（ちがーう、私の言いたいののはさっきの水玉は何？って私、髪、乾いてる。）

ドライヤーで乾かすのが面倒で、今日はタオルにくるんで寝ようと思っていたのに、もうすっかり乾いている。

（ただの簡単な魔法だが、それよりこの国には明日の天気だけを占う預言者がいるのか？）

（はあ？魔法？？ああ、天気予報ね、あれは、えっと高気圧と低気圧があって、それを天気図につて、私は理科は苦手なのよ！！）
科学も物理も工学も私にとっては全部、理科なの！

いろいろ説明を求められても、うまく説明できる自信はない、車庫の上にある二階の自分の部屋にノートパソコンを取りに行く、日本語は無理でもネットの中には分かる言葉があるかもしれない。
炬燵の上の食器を運んで台を拭き、パソコンを起動させる。

（これで自分で調べて、あと、いろんなことが分かるけど、すべてが真実とは限らないし、故意に人を傷つけるため悪意を書く人もいる。私は寝る、おやすみなさい。）

見て言葉がわかるだろうか、と疑問に思ったが、考えることを拒否する。

もう今は、温かい布団にもぐりこんで眠りたい。

（おやすみなさい）

一言伝えて手を振ると、さっさと自分の部屋へ戻ってぐっすりと眠った。

椿 3（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

主人公の容姿をかくの忘れていました。

誤字脱字がありましたら、教えてくださったらうれしいです。
感想も大歓迎です。

雪で滑って後頭部を打って、もしかしたら何か能力が、と思ったけど出来たのはでかいたんこぶだけだったメレンゲでした。

椿 4

携帯がいつもと同じ7時に音楽を流し始めた、起きてお弁当を作くらなきゃ、そう思って

目を閉じたままベッドの下に置いたバッグの中に手をつ突っ込む。

やっと見つけてスヌーズモードを止める、あと5分、そう呟いて、今日から休みだったことに気付いた。

まだゆっくり眠れると、掛け布団の中に潜り込む、そして、昨日のことを思い出した。

私、男の人を拾った？ エドアルド？ 日本語が分からなくて、でも手が触れたら言葉が分かって、そして魔法！？

夢見たのかな？ 昨日、自分が何の疑問も持たなかった事が、余計にただの夢に思えてくる。

自分には男の人を拾う願望でもあったのか、イケメンだし体格良かったし、若い人がほとんどいない今の職場だから癒しでもほしかったのだろうか。

でも、焼うどん作ったような？ それに、ふわふわと浮いた水の玉、考えていると眠れなくなつてごそごそと布団の中から這い出た。

忙しくてストーブに灯油を入れて無いので、暖房が入っていない部屋は寒い、その上にカーテンを閉め忘れたのか窓が半分ほど見える。カーテンの間から見える外は、少し明るくなっているパジャマの上にガウンを羽織って窓に近づいた。

カーテンが開いているだけで、外からの冷気が伝わってくる、きっちり閉めてエアコンの暖房をつけ、もう一度布団に潜り込もうと窓の前に立った。

外はいつの間にか雪が降っていて庭の木々に積っている、ずいぶん寒いと思ったら年末から正月にかけて天気予報の通り雪になったらしい。

はあーと息を吐くと窓の近くは余計に気温が低いのか、真っ白になる。

亜弓の住むこの街は滅多に雪が積もることはない、自分が子供のころは真っ先に外に飛び出して雪で遊んでいた。

庭を見下ろすと見慣れない人影が、ぽつんと立っていた。

父がよく来ていたグレイのスウェット、長い銀色の髪が昨日の出来事が夢でなかったことを教える。

このままだとせっかく助けたのに風邪をひいてしまう、それに聞きたい事が山ほどある。

あわてて部屋を出て階段を下りる、冷たい板張りの廊下に、スリッパを履いて来なかった事を後悔した。

リビングの雪見障子を開け、庭に面した縁側へと向かう、降りられるように天然石でできた足台に置いたままのサンダルを履いて庭に下りた。

この辺りには珍しい40坪以上ある庭は手前に今は枯れ草のような芝生が敷かれ、奥に母の好きだった花々が植えられている。

盛りの椿の前に、男が立っていてこちらを振り向いた。

「おはようございます。」

日本語が話せないはずではなかったのか？近づいて言葉をかけようと伸ばしかけた手が止まる。

驚いた顔と、返事が返ってこないことに、男は困った顔をして手を伸ばしてきた。

（間違っていますか？朝は、おはようございますではない？）

「いえ、あっています、びっくりして、日本語知ってたんですね？あ、おはようございます。」

「昨日、勉強しました」

「って、昨日って6時間くらいで？」

「得意なんですよ、言語は、それよりこれは何ですか？」

2本の赤い椿の下に、歪なひょうたんの形をしたふちが石でできた、白い砂利の場所がある。白い砂利の上にぼつりと椿の花が落ちていた。

「ここは祖父の生きていたころは池があって、その頃は庭はまだ広くて、この奥に裏山から湧水を引いていたんです。祖父が亡くなった時、相続税を払うために裏山を売って、池も無くなって、でも壊してしまうのは悲しいから、こんな風に残しているのです。」

価値の高い錦鯉を買っていたわけでない、譲ってもらった色鯉を飼っていた。泳ぐ様は優雅に見えるのに、縁日で取ってきた金魚を池で飼おうと、中に入れた途端パクリと食べられて大泣きした事もあった。今の季節は池の中に椿の花が落ちて、祖父と一緒に網ですくっていた、面倒くさいと言いながら結構楽しかった。手をたたくと石の蔭からゆらゆらと餌をもらいによってくる姿を思い出す。

「綺麗だ」

エドアルドの言葉に驚いて触れていた手を押しのけた、触って言葉が分かるって事は、考えていることが伝わっている？

「違う、言葉が、」

もどかし気に言葉を詰まらせて、怖がらせないようになのかゆつくりと指が伸びてきた。

（亜弓が私に伝えたいことだけ言葉の代わりに分かる、さっきは、子供の亜弓とお爺さんがきらきら光る池の水面の前で遊んでいた風景が見えてきた。）

（あなたは、何なの？どこから来たの？）

（私は、）

「待って、先にご朝飯にしよう、そして家でゆっくり聞くから。」
エドアルドの指から身を離し、背中を見せて家へと歩き出した。

椿 4（後書き）

要点だけ書けよ、と自分でも思います。でもそうしたら4行くらいで話が終わりそうです。

椿 5

昨晚ご飯を炊いていなかったの、朝はパンに食糧庫の中に残っていたわ、かめスープしかなかった。

今日は大量に買い物をして、掃除をして、と考えながら冷凍していたスライスチーズを乗せて、トースターに入れる。

でも、その前に解決しなきゃいけない事があるのよね、炬燵に座りテレビで朝のニュースを熱心に見ているエドアルドに目を向ける。

昨日の電気の光では灰色っぽい銀色に見えた髪は、朝の太陽の下では青っぽい白色に見えた、世界中の人を知っているわけではないが、こんな色の髪を持った人間っているのだろうか？動物だって見たことがない、鳥や魚にはいそうだが。

仏壇から昨日供えた小さな皿を下してレンジで温める、本当は朝供えるのが正しいらしいが、時間がないので夜供えて、しばらく置いて食べる事にしている。

昨日は食べられなかったが、寒いので傷んではないだろう、捨ててしまうのは好きではない。

お盆で焼けたパンとスープを運ぶ、テレビは消されてこちらを見ていた。
トレイではない

「買い物に行かなきゃ、これしかないの、」

「ありがとう、」

アクセントが少しおかしいが、はっきりと日本語を話している、理解しているみたいだし、それより何より、触ったら話が通じるって何よ！いけない今は食べよう。

「いただきます。」

手を合わせる亜弓を見て、エドアルドも同じことをして食べ始めた。自分にはパンを半分と昨日の焼うどん、彼には3枚パンを焼いている。

食べ終わって食器を片づけようと立ち上がると、エドアルドが先に持ってキッチンへと向かった。

「ありがとう、コーヒーを入れるから座って待ってて。」

「いや、ここで見ている。」

セットしたコーヒーメーカーのスイッチを入れてから、スポンジに洗剤をつけ食器を洗うのを珍しそうに見て、そっと泡を触っている好奇心いっぱいところが、彼に怖れを感じさせないのだろうか。

「コーヒーに砂糖とミルクはいりますか？」

「飲んだ事がない」

「じゃあ、飲んで必要なら入れてください。」

自分には牛乳だけ入れて、彼にはマグカップにたっぷりコーヒーだけ入れて炬燵に運んだ。

コーヒーを一口飲んで気に入ったのか、そのまま飲み始める。

どこから聞けばいいのか、何を聞けばいいのか分からず、少し沈黙が続いた、幹線道路からも外れているこの家は、時折遠くで車の音がするだけで静かだ。

「最初に、亜弓に謝らなくてはならない。」

「すまない、と頭を下げる、何を？」とびくりしていると、彼の手がそっと伸びてきた。

（あの、亜弓が貸してくれたパソコン？を壊してしまった。ネットの世界を追ううちに夢中になりすぎて、電圧？を上げすぎて中を焼き切ってしまった。）

「はあ？？中を焼き切ったって、電気はコンセントからだし、どうやって、」

亜弓はパソコンについてソフトはそこそこ使えるが、ハード面は全然明るくない、電気を通しすぎて壊したのは分かったが、どうして

そうだったのか見当もつかなかった。

（私はこの世界の人間ではない、国に帰ろうと転移したんだが途中で空間の歪みに巻き込まれたのか、気が付いたら、ここにいた。）
嘘じゃないよね、だって、触って言葉を伝えるって、この世界じゃ不可能だし、何より私をだましても、何の得もない。

それに、あの魔法、自分の体から離れた水分がふわふわと浮いていたのを思い出す。

（あなたの世界では魔法、みんな使えるの？）

（ああ、皆ではないし、力も同じではないが使える者もいる。私の一族はすべて使える。）

（火とか出せるの？）

人差し指を立てるとその先に小さな火がともる、1mほど噴き上がってふっと消え、上に向けた掌に水が溜まる、水は玉となりふわふわ漂い空気中に霧散する、消えた場所に小さな稲妻が現れくるくる動き風がそれをさっと攫うと消えていった。

「すごい、イリユージョンだ」

思わずぱちぱちと手をたたく。

「あなたの世界の人ってすごいね。」

（いや、この世界のほうがすごい、わたしは雷の力がこんなに使えるものとは知らなかった。今まで雷の魔法は攻撃にしか使った事がない、微弱な雷の力がこんなにも世界を作っている事は驚きしかない。）

雷の力って電気よね。そういえば、最初に電気を溜めたのは雷を風で集めたフラン何とか、（覚えてない）考えてみればこんなに身近に電気があって当然のように電気製品を使っているのって100年くらいしかたっていないのよねえ。人間ってすごい、かも。

（今まで、力を大きくすることはしてきたが、微弱な雷の力に意識を乗せる事は初めてだった、力のコントロールに失敗して壊してしまったのだ。）

それって、パソコンを使って、ネットの中に入っていくって事？意味分らない、

（とにかく、あなたの世界の人間ってすごいよね。）

（いや、私は、人間ではない）

（はあ???）

（竜だ）

椿 5（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ネットに入るってのは、昔読んだツイインシ〇ナル（懐かしすぎ）って漫画でネットに入っていくイメージです。詳しくは、覚えてません。

椿 6

「竜、、ってあの竜？空を飛ぶ？」

亜弓の頭の中には子供の頃再放送で見た昔話のアニメのシーンが浮かんでいる、男の子が背中に乗って、確か手に持っていたのは、ペロペロキャンディーじゃなかった、太鼓？

あの名前は、でんでん太鼓であってるのか？

思わず、現実逃避をしている亜弓だった。

異世界の人っていうのは、姿と魔法で否応なしに信じさせられてたが、竜っていうのはどう考えればいいのか分からない。

「あなたは竜っていう種族なの？」

もしかしたら、自分が人間であり黄色人種、日本人と言うように、竜って国名か種族名があるのかもしれない。

「違う、目を閉じて、」

亜弓の手に軽く触れていたエドアルドの指が、ぎゅっと力を入れて掴んだ。

目を閉じてじっとしている、言われてもいないのに、息まで潜めた。閉じた瞼をそっと手で覆われる。

（見て、）

目を閉じているはずなのに、青い、いや藍色に近い空が広がっている、雲は下方にある、この空は成層圏に近いのか。

カメラがひくように視界が広がっていく、空しか見えなかった場所に白い竜が飛んでいるのが見えた。

日本昔話の竜とは違う、西洋のドラゴンに近い青みがかかった白いドラゴン。

でも時々イラストで見るとがった顔と、ぼてっとした下半身小さな

翼のドラゴンではなくて、丸っこい顔で鼻先が少し出て、大きな釣り目があった耳（飛んでいるときは伏せてるらしい）と頭に突起がいくつか、背中には大きな翼。

これって、猫？毛皮の代わりにうろこ翼のある猫？

飛ぶ角度を下へと変える、空の色が徐々に明るい青に変わっていく、そして視界の先にぐんぐんと地上が見えてきた。

ぎっしりと木々が茂る森、蛇行して流れる川、その川沿いに家らしきものと開墾された畑が見える、その先には険しい山がそびえていた。

くらりと視界が揺れ、体が前のめりに倒れる、天板に頭をぶつける前に手で止められた。

「すまない、大丈夫か？」

「ちょっと、目が回るだけ。あのドラゴンがあなた？」

「そう、炎と氷の竜が私だ。」

炎と氷、全然違うと思ったけど、考えてみればどっちとも温度だし、思い出した髪の色がどこかで見た事のあると思っていたが、氷河の奥の青みがかった氷の色、それに炎も高い温度になると青白くなる、なんだか納得するような。

「って、納得するんじゃないかって、どうして今は人間の形をしているの。」

「これは、その、」

言葉を探すように言葉を濁す、まあ、あのドラゴンの姿はこの世界では目立って仕方がないだろうけど、他に何か重要な事だろうかとかと口を開くのを待った。

「省エネだ。」

「はあ？省エネ？」

「もちろん目立つのもあるが、この世界ではなかなか魔力が回復し

ない、竜の巨大な力と体を維持するには魔力の補充がいる。私の世界では意識しなくても空気中の含まれる魔力で大丈夫なのだが。この姿なら消費する魔力を抑えられる、」

「駄目じゃない！！回復しないのに魔法を使ったらっ！1000カロリー分しか食べていないのに5000カロリー分動いていたら死んでしまうでしょう。そうでしょう。」

両手でエドアルドの腕を掴んでゆする、自分でもこんなに必死になるのか分らない。

「大丈夫だ、これくらい竜の自分にとって何でもない、それにこの庭には精霊がいるから他の場所に行くより回復力が高い。」

「精霊がいるの？」

庭へ視線を向ける、祖父母や両親が大切に慈しんでいた庭に精霊がいるのは嬉しい、自分には見えないけど。

「多くはないが、見るか？」

手を触れて庭を見る、半分透き通ったふわふわした丸いものがいくつか浮いている。

精霊ってかわいい女の子や男の子に羽があるんじゃないの？子供のころに夢見た物がガラガラと壊れていった。

椿 6 (後書き)

竜は、某映画に出てくる、某ドラゴンがモデルです。大好き!!

椿 7

彼の世界はこの世界とは違う、青い空や広がる森林、きれいな川、精霊がいると聞いても、信じてしまうほど自然が綺麗だった。

「エド、エドワールド、帰れるの？」

エドアルドの名前は手を触れていると呼べるのに、言葉にすると言いにくい。

「エドでいい、はっきり言って今すぐ帰るには魔力が少し足りない。それに、偶然飛ばされてきたため自分の世界がどこなのか分からない。」

あんなに綺麗な場所から、ほとんどがアスファルトで覆われたこの町に来て大変だろう、それに、知った人が一人もないこの世界。自分が両親を一度に喪った時のどうしようもない寂寥感を思い出す。どうにもできないどうしてあの時出発する両親を止められなかったのか後悔と、一人残されたさみしさ、呼吸ができなくなるような孤独感。

「帰る場所が見つかるまでここにいたらいいわ。」

エドが帰る時、またあの孤独感を味わうかもしれない、でも今度は彼が故郷に帰れる喜びもきっと分かち合える、死んで二度と会えないのとは違う。

「ありがとう、本当にいいのか？」

「大丈夫よ、部屋だって沢山あるし、扶養家族が一人増えたって、でも近所の人にはなんて言おう。」

古い住宅地の分近所づきあいが多い、時に煩わしいと感ずることもあるが、両親が亡くなった時は本当に助けられた。今だって、ずいぶん気にかけてもらっている。

「アメリカに嫁に行った母さんの姉の息子って事でいい？でも、いくら外国の人って言ってもその髪の色は目立つかも。」

ふっと風が吹いて、目の前のエドアルドの髪が短い茶色になった。

「これでいいか？私にはこの国の通貨を持っていないが、これを換金できないか？」

見たこともない金色に輝く500円玉くらいの宝石を掌に載せて差し出された。

「綺麗、でも、駄目だわ、測定器にかけられたらこの世界にないものだとすぐ分かるもの、そうしたら大騒ぎになる。」

「そうか、私にできる事を教えてほしい。」

しゅんとして掌の宝石を見つめる、そしてそれを亜弓の手に渡した。
「換金は無理でも貰って欲しい、私の世界でもこの大きさは珍しいものだ。」

「ありがとう、大切にするね。」

希少価値があるものなら断ろうと一瞬思った、でももし自分がエドの立場なら、ただ世話になるだけは心苦しいと思う。

貰うことでこの家で暮らす事に、遠慮が少しでもなくなればいいと思った。

「とにかく、これ以上雪が積もる前に一緒に買い物に行きましょう、沢山買わなきゃいけないから郊外のショッピングセンターまで車を出すわ。」

「車？あるのか？」

「ええ、父の車が、」

父のカジュアルな服とコートを着せる、靴はブーツでも何とか様になる、剣を持って出ようとするエドアルドを説得して部屋に置いて出た。

玄関横にある車庫のシャッターを開ける、エドアルドはわくわくしながら見ているようだった、昨晚ネットで見たのか、なんだか異世

界人とか、ドラゴンとか言っても子供のようだ。

まだ道路には積っていないけど、この調子だと通行が途絶える夜になつたら道路にも積りそうだ。

久しぶりの運転に緊張しながら車を出した。

「亜弓はどうして一人で暮らしているかい？飾っている絵は両親？」

「あれは写真よ、」

ネットで得たにわか仕立ての知識では、まだ穴がたくさんあるらしい。

「両親は3年前結婚20周年記念の旅行中バス事故で亡くなったの、」

今でもその事を考えると苦しい、でも時は優しくてえぐり取られたような傷も少しずつ癒えてきた、でも、今でも時々もうこの世にはいない姿を探して目覚める事がある、苦しくて自分も一緒だったらどんなに良かったかと、涙が止まらなくなることもある。

きっと、私が彼を入れたのは自分と同じ孤独感を感じていたのかも
しれない。

「エドの御両親は？心配していない？」

「竜はあまり子供が生まれない、寿命の1000年で一組の夫婦に一人多くて2人、生まれて50年から80年ほど一緒に育てられ、それから番が見つかるまで男は一人で暮らす者がほとんどだ。だからすぐには心配などしないと思うが、心語が届かないと心配になるだろうな。」

「ごめんなさい、そうだね、誰だって、ドラゴンだって家族は大切だね。」

正体がドラゴンと聞いても、実際目になっているのは人間の姿なので実感は伴っていないかった。

なのに、寿命が1000年って、亜弓は動揺していた。

椿 7（後書き）

ありがとうございます。

12月二年末の話で、1月に正月、って感じで実際の月に合わそうと思っていたのに、まだ1日いや、一晩しかたってない、

椿 8

この雪だと正月休暇中家から出れないかもしれない、もっと積ったら、ほとんどペーパードライバーに近い亜弓は運転する自信はない。一人暮らしで為日常の買い物は近くの商店街で済みますので、ショッピングセンターへ行くのは久しぶりだった。

休日も家や庭の手入れをする方が好きで、友人からの誘いがないとほとんど自宅で過ごしている。

もちろん、友人と遊びに行くのも好きだが、高校卒業以来仲の良かった皆は、ばらでなかなか会う事が出来ない。

同じ職場の女性は既婚者がほとんどで年上ばかり、独身の男性も何人かいて飲みに誘われたりもしたが、1対1で付き合おうと思う相手はいない。

年末の買い物のか、店内は混雑していた、ついでに一緒に昼食を取ろうと思っていたが、この時間から、もう知られている飲食店には行列ができていた。

その大勢の人が、男も女もこちらを見ている、通り過ぎた後からわざわざ振りかえって見ている人もいた。

エドアルドは今時のイケメンというより綺麗な形容詞の方がよく似合っている、芸能人とはまた違う独特のオーラが目を引くのだ。

亜弓も最初は映画俳優のような存在に思っていたが、困った顔やしゅんとした顔を見ているうちに、一人の人間（本当はドラゴンらしいが）にしか見えない。

「すごいな、祭りでもあるみたいだ。いつもこういうのか？」

子供に気を取られている男性がぶつかってきた、よろけた亜弓の体をエドアルドが支え、手をつないだ。

「大丈夫？」

「大丈夫、今日は年末の買い物客が多いの、それにセールだしね。食料品の前にエドの服を見に行きましょう、それにパソコンも、」

（すまない、）

（いいの、パソコンは古い型だからそろそろ買い換えなきゃと思っ
てたの。でも、もう壊さないでね。）

（大丈夫だ、パソコンを使わないで直接配線からサーバーにアクセ
スすることにした。）

（……配線焼き切らないでね。）

（… 気をつける…）

エドアルドの衣料品を買いに行く、着られるものは父親の洋服を着
てもらおう事にして、歳末バーゲンで下着や服を何枚か買いそろえる。
遠慮していたが、帰るのがいつになるのか分からない以上、それな
りの物はあるだろう。

長くいる事になるなら、このままではだめだろう、仕事を探すにも
戸籍とかどうしたら、暗くなる考えを端に押しやる。

ショッピングセンターに併設されている電気店へ向かう、パソコン
を買って一度車に荷物を置いてから昼食をとって食料品を買おう。
電気店へ入った途端エドアルドの目が輝いた。

家に置いていない空気清浄機や食器洗い機、ジュースや電気泡だ
て器まで一つ一つ聞きながら楽しそうに見ている。

年末でお客が多いので、店員がつかないで良かったとほっとした。
床に見本として置かれた自動掃除機の前に着いた時、エドアルドは
じっとそれを見ていた。

突然消えていたランプがついて、動き出した、大勢の人の足元をす
り抜けて、くるくるとすごい速さで動きまわる。

ほとんどの人は自分の買い物に気を取られて気付かないが、何人か
は驚きに目を見張っている、エドアルドは楽しそうに笑っていた。

亜弓は握っていた手にぎゅっと力を入れて、エドアルドの目を見た。

（魔法は、使わないでって言ったのに、）

（ごめん、つい珍しくて、今度から使うときはちゃんと言う。）

（人間に化けてて本当の正体がドラゴンで、魔力が沢山あったも、回復が出来なかったら減っていくだけだから。）

（心配かけてすまない、でも、人間に化けてるわけではない、この姿も私だよ。）

（だって、髪の毛の色が変えたのは、）

（あれは、目くらましをかけたただけだ、亜弓には本当の私の姿が見えるはず。）

じっと見ていると、最初見た青みがかった白色に見えてきた。

（あ、本当、）

胸の下あたりまである髪を触ってみようと、そっと手を伸ばした。手が届かないうちにどんと背中を押される。

「亜弓、何やってんのよ、こんなところで美形と見つめあって、」振り向くと、幼稚園から親友だった西田里子がにやにや笑ってこちらを見ていた。

周りも遠巻きにこちらを見ている、エドアルドと普通に会話をしているはずだったのに、傍から見れば、黙って見つめあっているように見えていた事に気づいて、亜弓は真っ赤になった。

椿 8（後書き）

気が付いたらお気に入りが50件以上になっていました。
ありがとうございます。嬉しいです。

しかし、話が長いです。まだ2日目、、、

椿 9

「亜弓の恋人？日本語分かるの？私は亜弓の親友西田里子よ、よろしく。」

「よろしく、私は親戚のエドアルドだ、亜弓の家にお世話になっている。今口説いて恋人になってもらおうと、がんばっているところだ。」

「がんばってね、亜弓は相手の都合とか気にしすぎて、消極的になりすぎるからガンガン押してね。」

里子はエドアルドの手を掴んでぶんぶん振り回してる。

亜弓はさっきまで気づきもしなかった周りの視線に気後れして、なかなか顔の赤みが引かない。

「里子、どこかで食事をしながら話さない？」

「残念、今日は家族と待ち合わせなのよ、次の仕事が決まるまで親孝行するわ。」

里子は幼稚園で知り合って、同じ中学校まで進み、看護学校から他県の病院へ仕事に行き先月引き払ってこの街に帰って来た。

まだ新しい仕事は決まっていなさそうだが、この不況でも看護師の求人は困る事がないので、亜弓は少し羨ましい、でもそれより人の世話が好きで看護師を目指し、実現した親友を尊敬している。

絶対二日には遊びに行くからと約束をして別れる、里子は人目を気にせずぶんぶん手を振りながらエスカレーターを降りて行った。

見えなくなり、エドアルドを振り返ると楽しそうにこちらを見ている。

「さ、パソコンを選びましょう、」

どの機種も同じように見える亜弓は、店員にアドバイスをもらい選んだパソコンをカードで買って車へと持っていく。

かさばる荷物を半分持とうとしても、断られる、自動扉でさりげな

く扉を開けて先に行かすところとか、彼のいた世界にもレディーファーストの習慣があるのだろうか。

エドアルドは初めての場所でも全然迷うことなく、駐車していた場所へとさっさと向かっていく、自分で停めたはずなのに迷ってしまう自分とは大違いだ。

車を止めていた場所はショッピングセンター内の4階に当たる屋内になる、壁の無い吹き抜けは凍えるように寒い。

外はまだ止んでいない雪が降り続いていた、亜弓の暮らすN市は年に一、二度しか雪が積もらない、それもせいぜい5センチあるかないかだ。

明け方近くから降り始めた雪は、亜弓の初めて経験したことだった。

昼食は彼にとって珍しくて自分では作れないものと迷っていたら、彼の希望でラーメンに決まってしまった、まだ時間も早いのですが席につける。

ネットでラーメン好きのブログを読んで、あまりにもすごい褒め言葉に興味をひかれたらしい。

彼の世界にはない味なのか、おいしいと言いながら出された箸で必死になって食べていた。

いつまで一緒にいられるのか分からないけど、彼用の箸や茶碗も買う事に決める。

カートを押しながら食料品を選ぶ、母が生きている頃は一緒におせちを作っていた。

それだけではなく、季節の行事に合わせて料理やお菓子の作り方を教えてもらった。

母も自分の母親や、義母に教えてもらった物を私も誰かに伝える日が来るのだろうか。

一人きりになり、そんな楽しさがある事さえいつの間にか忘れてしまっていた自分に気づく。

エドアルドが帰るまで、この国の事を楽しさを知ってもらいたい、自分の世界に帰ってから楽しい思い出になるように。

残念ながら今からおせちを作る時間はない、いくつか食べそうなパックを選んでカートに入れる。

数日分の食材や米、年越し蕎麦やお菓子、牛乳、切れていたコーヒ―や紅茶、エドアルドが立ち止まって珍しそうに見ているシリアルや、スポーツドリンク類の類、確認しながら入れている。

途中で隣のお世話になっている瀬田さん（だいぶ前に旦那さんが亡くなって一人暮らしで、お世話になっている。）に電話して必要なものがないか聞いて、その分の買い物も済ませる。

割れるのが心配な茶碗だけ持たされて、重くなったカートはエドアルドが押していく。

「亜弓の、国はすごいな。」

世界と言いかけて国と言いかける、知り合いもいるかもしれない所で異世界の話を聞かれたら、頭がおかしいか、妄想好きな人に思われるだろう。

「エドの国にはないの？」

「城とか、神殿、行政署の大きい建物はあるが、商業施設が集まったこんな場所はないし、それに皆豊かで、食べ物に困っている人は誰もいなさそうだ。」

カートの上も下に置いた籠もいっぱいになり、レジを待つ長い行列の後ろに並ぶ。

「エドの国の人はどんな風なの？あ、よかったら今度ゆっくりとエドの国の話を聞かせて、」

周りの人より頭一つ高く顔も整っているエドアルドは、周りからの目が集まっている、当たり前障りのない話をしながら列がゆっくりと進むのを待った。

車に戻ってエンジンをかけヒーターをつけて、なかなか暖まらない手をこすり合わせる。

「亜弓、確かに私の力はこの世界では回復が遅い、でも絶対量が多い私にとって空気を暖めるくらいは、亜弓が三歩ほど歩くのと変わらない力しか使わない。だから、手助けするのを許してほしい。」そつと冷たい手を包み込まれる、両手から熱が伝わり、たちまち車内の空気も暖かくなった。

「ありがとう、」

素直にお礼を言う、エドアルドも子供ではないのだから、それどころか自分より年上に見えるのに、つい自分が過保護すぎたのではないかと反省する。

降り続いている雪で視界が悪い、その上ショッピングセンター沿いの幹線道路は走っている自動車が多く、道路の雪は積もっていないかったが、家へと向かうにしたがって道路も白くなってきた。行きは車の中で会話をしていたが、今はとてもその余裕はない、早く帰りつきたい。

怖くてスピードを落とすと、ぎしぎしとタイヤの下で雪が鳴った。

椿 9 (後書き)

遅くなりました、読んでくださってありがとうございます。

12月の話は12月中にと時間を合わせて書きたかったのに、もう3月なのに去年です。いつ追いつくのでしょうか、

椿 10

駅から家の方向へはゆっくりとした登り坂になっている。

慎重にハンドルをしっかりと持って運転する、肩に力が入る、絶対帰り着く頃は肩が凝って首が痛くなっているだろう。

もうすぐ家に着く、ほっと気が緩んだ途端、車の後輪がすべる、とっさにブレーキを踏む、急激に横向きになり家の塀にぶつかりそうになった。

あわててハンドルを切ろうとしたその手に、エドアルドの手が重なった。

気が付いたら反動もなしに車が止まっていた、目の前に迫る木製の塀に頭が真っ白になる。

「大丈夫だ、ゆっくり力を抜いて、アクセルから足を離して、」

言われた通りかちかちに固まった足をアクセルから離す、車はハンドルも回していないのにゆっくりと進行方向に向き直って家へと進み始めた。

「エド？」

「ああ、それと風の精霊が助けてくれた。亜弓は皆に好かれてるね。」

「ありがとう、」

心臓がドキドキ波うち、体が震える、ありがとう、と心の中でもう一度繰り返し返した。

車はそのまま車庫まで入り止まった、立ち上がろうとして、膝がぐくぐくして体に力が入らない事に気がついた。

「そのまま待ってて、」

助手席から出て、ぐるりと前方を回って運転席を開ける、そのまま屈むとひょいと亜弓を抱き上げた。

「待って、大丈夫、歩けるから、」

子供の時ならともかく大人になって男性に抱きあげられるのは初めてだ、慌ててわたたと抵抗しだす。

両手でいわゆるお姫様だっこから、片手で年端もない子供を抱えるように支える。

「暴れるな、落ちるぞ。」

もう片方の手でいくつか荷物を持ち膝で押してドアを閉める。

歩き始めて、後ろに仰け反るように落ちかけてあわてて首に掴った。まるで重さを感じていないように軽々と抱えている、自分より体格が良くてたぶん年上、それでも、この世界に初めて戸惑う様子を見ていると、どこか保護者になったように感じていたのに、改めて異性である事に気付いた気がした。

ドアの前の廂の下に下される、荷物を取ってくると言って踵を返すその姿に、少しさみしさを感じてそれを振り払うように頭をふって、わずかの時間にも降り積もった雪を落とす。

鍵を開け終わった頃、両手に荷物を抱えてエドアルドが帰ってきてあがりかまちの上に置く、

一緒に取りに行こうと、車庫へ向かう後ろについて行こうとした。

「今度で終わるから亜弓は中に荷物を運んで、」

「わかった、ありがとう、お願いね、」

瀬田さんの荷物だけ横に置いて持てるだけ持ってキッチンに向かった。

運び入れた食糧を片づける、玄関にまた荷物を取りに行く前にエドアルドが入ってきた。

黙々と片付ける、ひと段落してエドアルドの前に立った。

「さつきはありがとう、私びっくりして、急ブレーキは踏んだら駄目だったのに。」

エドアルドがいなかったら確実に事故になっていただろう、そんなにスピードは出ていなくても怪我をしていたかもしれない。

まるで怖がらせないようにゆっくりとエドアルドの腕が回り抱きしめられる、温かい体温が伝わり、抱きしめられた驚きより暖かさにほっとする。

（何もなくてよかった、私がないときはこんな天気の日も運転しないように、）

その理不尽な言葉に亜弓は笑いがこみあげてきた。

（わかった、その時は呼ぶから助けてね。じゃあ、落ち着く前に瀬田さんのところに荷物を持って行きましょう。）

玄関のインターフォンを鳴らして名前を告げると、しばらくたってドアが開いた。

「ありがとう、大変だったでしょう、上がって暖まって。」

上がるように勧めてから、亜弓の後ろに立っているエドアルドに氣付いて目を丸くした。

「ついでだから気にしないで、彼はアメリカにお嫁に行った母さんのお姉さんの息子さんなの、今度日本に来る事になって私の家を提供したの。」

「初めまして、エドアルド・ファルクです。よろしくお願いします。」

「まあまあ、こんなハンサムさんと知り合えてうれしいわ、こちらこそよろしく願いしますね。亜弓ちゃんよかったね、さ、上がってらっしゃい。」

「ごめんなさい、昨日まで仕事だったから、今から掃除をするの。約束通り元旦に遊びに来るね。」

「残念、じゃあ明日は絶対二人で来てね、待ってて亜弓ちゃんにあげようと煮しめを作ってたの。」

大きめの皿に山盛りに煮しめを入れてきた、いつもの倍以上ある。瀬田さんの作る煮しめは母が祖母から伝えられた味に似ている。

お礼を言って家へと向かう、わずかな距離でも積もった雪で歩きにくい。

「左隣の前野さんは今実家に帰ってるの、今度挨拶に行きましょう。」

アパートに住んでいる友人が、今時信じられないと言った濃密な近所付き合いは、面倒だと思ふ事もあるが、嫌いではなかった、エドアルドの存在もあっさりと受け入れてくれたのが嬉しかった。

椿 10（後書き）

読んでくださってありがとうございます。ってワンパターンすぎ。
だらだらと続きますが、楽しんでくださったら嬉しいです。

椿 11

「本当は年末に大掃除ができればいいのだけど、30日まで仕事だったからさつと済ませましょう。」

ハンディモップを使って上から掃除していく、休みの日はいつもそれなりに掃除しているのでそこまで汚れていない。

本当は障子も真っ白な新しいものに張り替えたいのだけど、破れていないのでつい何年も、そのままにしている。

「どうして年末に掃除するのだ？」

「うーん、日本人は正月が、新年が好きなのよ、今年の汚れを綺麗に落として、年神様を迎えるの。と言っても、近頃の人には正月休みは海外で、って人の方が多いかも。」

両親が生きていた時は、鏡餅について門松を作り、庭に白砂をまいて新年を迎えた、今の自分にはそんな余裕がない。

全体に掃除機をかけて、縁側を糠で磨く、畳の居間は晴れた日が続いた頃に水拭きをしよう。

エドアルドは亜弓の指示で、重い台を動かしたり、床の間の掛け軸と風鎮を新年用に変えたりしている。

エドアルドが空気を暖めているのが続いているのか、窓を拭くために開けても家の中は温かいままだ。

普通なら冷たい風が吹き込んでくるはずなのに、しんと雪の降り続く外に掌を上にして差し出す。

軒下から急に温度が下がり掌に雪が積んでゆく、引くと暖まった空気に雪が解けた。

どんな仕組みになっているのだろう、確かよく聞くエアカーテンは扉を開けると上から風が吹き込む仕組みだった気がする、これは魔法だろうか？

とにかく考える事は後回しにして働く、何だか昨日から後回しにし

た事が多すぎる気がする。

大掃除にはあまりにも手抜きだが一応掃除が終わった時は、5時をまわっていた。

綺麗になった床の間と玄関に半紙を敷いて鏡餅とミカンを飾る、エドアルドは好奇心いっぱい顔でこちらを見ている。

「全部済んで炬燵でくつろいでから疑問に答えるわね、」

答えられる物にだけだけど。

エドアルドに進められて先に風呂に入ってから夕食を作る、瀬田さんにもらった煮物と、年越し蕎麦と、それに入れるかき揚げを作るついでにてんぷらも作る事にする。

自分だけなら揚げ物はいいのだが、男性には足りないかもしれない、あ、でもドラゴンって何でも食べるのだろうか？

まあ、昨日は美味しそうに食べてたし、ラーメンも美味しそうだったからいい事にしよう、麺類が続くけど仕方がない。

その間にも、買ってきたおせちを重箱に詰める、手作りで作ろうと思っていた何種類かは下ごしらえをして冷蔵庫にしまう。

夕食は楽しかった、この家で一人だけではない食事は久しぶりだ。亜弓に教わった通り、御馳走さまと手を合わす、神とかではなく食材に感謝を言う事を気に入ったらしい。

「私は飲まないけど、お酒があった方が良かった？」

「いや、今はコーヒの方がいいな。」

食器を片づけ、コーヒと菓子を準備して炬燵に座った、もうやることはない、話をして眠たくなったら寝るだけだ。

「ドラゴンは何でも食べるの？食べたらいけない物とかある？」

先にこちらから質問をする、エドアルドにはネットやテレビで情報を仕入れられるが、亜弓は教えてもらうしか情報源がない。

「竜の形態の時は自然の気をもらうからあまり食べないな、時々気が向いたら狩りをすることもあるけど、食べる時はもっぱら人の形をとっている時が多い、なにせ、竜だと生で食べるか炎で焼くかしかないしな。人の方が調理方法や味付けが変化に富んでいるから楽しめる。何でも食べるぞ、人が食べられるものなら、それに美味しかったら嬉しい。ああ、そうだと雌は竜の形態でも妊娠中によく食べる。母が妹を身ごもった時卵を産むまで、よく父と狩りに出たよ。」

「よかった、じゃあ、何を作ってもかまわないのね。」

「亜弓の作ってくれた物は美味しい、時間があったら教えてほしい。」

「わかった、今度教えるね、ああ、それと、エドってエド、ウアルド・ファルクが本名？」

瀬田さんに名乗った名前は、亜弓も聞いたのは初めてで何だか、自分にはそう言わなかったのが寂しかった。

「いや、仲間は皆エドアルドと呼ぶ、正式名はエドアルド・ヴェルダナン・スルツ・ファルクでいいかな。」

「はあ？」

「神が最初に竜を4種族作った、その一種炎氷の竜ヴェルナダン一族の13代目でファルクの谷で生まれたエドアルドだな。もつとも、子竜の時叱られた時ぐらいにしか呼ばれた事がないが。」

亜弓の頭の中に、大人のドラゴンの前に正座して項垂れる小さなドラゴン姿のエドアルドが浮かぶ、想像しかないけどシヨッピングゼンターの様子とか考えると、やんちゃそうだな。

「エドは何歳なの？」

眉間を指で押さえながら、エドアルドに尋ねる、

「230くらいかな、100年くらい親の元で育ち、成人、成竜は200歳くらいかな、成竜式はないけど。」

「あ、そうだと、ネットで見たのなら、竜よりドラゴンの方が近いかな？」

「竜って言葉や文字の方がクールじゃないか、」

「つて、あんたは漢字の書いたTシャツを喜ぶ外人か！」
思いつき突っ込んでしまった亜弓だった。

椿 11（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

前回更新の時お気に入り登録がもうすぐ100行くかもーと喜んでいたら、150超えてました。

びっくり、ありがとうございます。

楽しんでくれたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4787q/>

flowering garden

2011年3月11日20時02分発行